

<<東北魂>>を鼓舞する  
電子新聞

発行所 株式会社遊無有

〒207-0005  
東京都東大和市高木 3-315-1-2-2  
http://www.yumuyu.com/  
e-mail:yumuyu@wj8.so-net.ne.jp

# 東北復興

Rising up, TOHOKU!

2017年(平成29年)6月16日 金曜日

無料

## 第61号

毎月発行

発行 2017年(平成29年)6月16日 金曜日

### 【当新聞発行責任者 兼編集長兼記者紹介】

#### 【砂越 豊】

宮城県生まれ、63歳、経営  
コンサルタント、趣味は、縄  
文文化研究、この2月に株  
式上場プロフェッショナルを  
養成し、IPOの経営者教育  
も行うスクール『IPOマス  
タースクール』を開校、校長  
就任



## 日常復帰への苦闘

### 大震災から6年を過ぎた被災者と避難民の 方々の心情をあらためて考える②

前号では、筆者の日常崩壊の小さな体験を通し、深い井戸の底から青空を見上げるような思いで、被災者の方々の心情を想像してみようという不遜なことに挑戦をいたしました。そうしたことでもしなかり、被災者の方々の心

情は微塵も分らず、入り込めず、心を通して交流することも出来ないと考えたからです。とはいえ、壮絶な被災体験は外からはまったく分かっていないことも十二分に承知しております。その点をご理解いただきたいと思

今回は、前号に続き、あの大震災から6年以上経過したいま、またはこれまでのプロセスのなかで、どうやって日常へ復帰していくのか、いったんのか、あるいは永遠に復帰できないのかを、想像させていただきつつ、この記事を書いていきたいと思います。

突然の死、徐々に死ぬ 筆者は、いまから約九年前に突然母を亡くしました。それまで重篤な病氣もなく、突然の死でした。計報を聞いたときは、き

つと何かの間違いだと思いました。現実として受け入れることが出来ませんでした。しかし、実家に帰り、遺体と直面したとき、受け入れざるをえませんでした。そこからは、自らの親不孝の数々を思い出し、取り返せない過去を悔やみま

自分の親不孝が母親の命を縮めた自分を責めま

遺族にとつて、近親の突然の死は、大きな喪失感をもたらします。その喪失感とは、心がぎれてしまう感覚であり、その経験は初めてでした。

近親の死は悲しく悲惨な体験ですが、それでも、重篤な病氣で徐々に死に至るというプロセスならば、まだしも救われる部分があると思

しかし、突然の死というものには暴力的です。心の破壊といえます。

最も身近な肉親の死、親族の死、知人や友人の死という二度と取り返しつかない体験をして、人間は生きて行かなければなりません。生き物としての人間自身の生きる意志がそうさせるのだと思います。

心に深い傷を抱えたまま、朝起きて、顔を洗い、朝食をとり、たわいもないTV番組も見たり、近所の人と天候の話などを交わす日常を取り戻さなければなりません。

ありふれた日常というのは、多くの決まりごとの集積で成り立っています。何一つ欠けても、日常を構成しないのです。

震災前にはあたりまえで意識もしなかった日常は、あのときを境に崩壊しました。再び、生きていくための仮の日常を獲得しなければなりません。

こうして、壮絶な体験をされた被災者の方々は、再

構築したありふれた仮の日常と、心の深い傷が分裂しながら、あるいは傷に固いフタをしながら、大震災後の数年間を生きてこられました。

この均衡を守り続けるには大変な精神的努力と労力を要求されます。例えるならば、仮の日常を身にまとった自分と、悲惨な体験を心の奥底に押し込んだ自分の、二人分の人生を生きていくということだからです。

大震災から数年という期間に蓄積された心の疲労はピークに達していることでしょう。

ふたたび傷口を開く 克服するためには、思い出したくもない悲惨な体験をもう一度引きずり出し、真正面から対峙する必要があります。

しかし、それは耐え難い状況だと推察されます。そのことを証明するかのように、現在の被災地では、皆さんの被災者の方々が苦しみがき、解決不能と思われようという問題を抱え、自分だけでは解決できずに心のケアの専門家のサポートを受けています。

特に子供が大変な状況に追い込まれているようです。最大の犠牲者を出した宮城県石巻市では、多くの問題が報告されています。

ある中学生の話として、亡くなったときやだいの遺品を持って学校に通い続けていた自分が死ぬばよかった」と中学進学後にリストカットした事例も報告されています。

また、亡くなった子供への思いが強いあまり、生き残った我が子に愛情を向けられないという母親もいます。生き残った子供が頑張りつつも「天国からきょうだいが助けてくれた」と、亡き子供を中心に考えてしまうようです。そのために、生き残った子供は、褒められることがなく、自己肯定感が弱体化していくという悪循環に陥っているようです。

逆に、生き残った子供から離れたくないと、登下校

にまで付き添う親もいるようです。こうした事例に対して専門家は次のように指摘しています。

あまりに衝撃的な体験をすると、普段は表に出さないようにしている意識が、時間が経過して急に現れることがある。特に子供は感情を体で覚えており、体験を言葉で話して心の回復を図ることが大事であり、ケアが必要である

(日経新聞…2017年5月22日版より抜粋)筆者による最小限のアレンジも加えたことをお断りしておく)

こちら側の日常へ復帰

しかし、この心の統一プロセスには大きなリスクが伴うことでしょう。

すんなりと克服できない方々もおられると思うので

とはいえ、生き続けるためには、悲惨な体験も乗り越えなければなりません。

この葛藤のなかで、また悲惨な体験に引張って行かれるか、こちら側の日常に復帰するのかがこの苦闘が展開されると思うのです。

その苦闘はひとりでも可能ですが、やはり助けも必要です。心の専門家も、地域の人たちの助けも重要になると思うのです。

ですから、孤立してはいけません。常に、外に向かって、心のコミュニケーションを保持し続けなければなりません。



水揚げしたばかりのホヤ

## 来年に【ホヤまつり】を開催予定 新鮮でおいしいホヤを食べて 国内消費を大きく伸ばそう!

三陸の珍味であるホヤは、この新聞でもたびたび取り上げ、また「三陸酒海鮮会」でも幾度となくホヤ料理を提供して、出来る限りホヤのPRをしてきました。とはいえ、まだまだホヤの認知度は高くなりませんし、ホヤファンはそれほど増えていないというのが現状です。

その理由の主なものとしては、残念ながら、過去にあまり新鮮ではないホヤを食べた結果、ホヤ嫌いになってしまった人たちが多すぎるようです。ホヤは、ここ数十年間、国内消費はどんどん落ち込む一方で、その代替としての近隣諸国への輸出構造がすっかり定着してきました。加えて、六年前の大震災後の福島第一原発の風評被害で、最後の砦の輸出も大きく減少しました。



新鮮なホヤの酢の物

その結果、大変残念ながら、昨年のホヤの大量廃棄という事態を迎えてしまいました。来年は「ホヤまつり」しかし、うれしいことに、大量廃棄のニュースに心痛め、ホヤのこうした状況をみかねて何とかしようという方がたくさんおられることが分かってきました。そこで、当新聞では、こうした方々とともに、来年にはぜひとも【ホヤまつり】を企画開催しようと思いを立ちました。

この計画を周囲に言い続ければ、後には退けなくなると思われ、現在たくさんの方々の機会を利用し、多くの方々に、この【ホヤまつり】を事前PRしております。また、この【ホヤまつり】への協力のお申し出もすでに集まっております。新鮮なホヤ提供と豊富なホヤレシピ これから具体的な構想を練り上げてまいります。最初は、なんとと言っても新鮮なホヤの提供です。ホヤは、とても繊細な食物です。水揚げしてからおいしく食べられる期間が想像以上にとても短く、そのため、輸送に日数を要する地域への販売はとてむずかしいのです。この問題をクリアするために三陸のホヤ生産者の方にご協力をいただくことにいたしました。

次は豊富なホヤレシピですが、ホヤ料理は刺身や酢の物だけではなく、現在いろいろなおレシピが開発されています。これも【ホヤまつり】で提供しようと思えます。そうして、ホヤを通じた新たな三陸復興支援を実現してまいりたいと思っておりますので、ぜひ来年をお楽しみください!



【完成品】

## 第34回 水産業再興のための 料理レシピ紹介

### 三陸沖の銀鮭 を使った 《銀鮭のムニエル》



郷土料理愛好家  
松本由美子氏



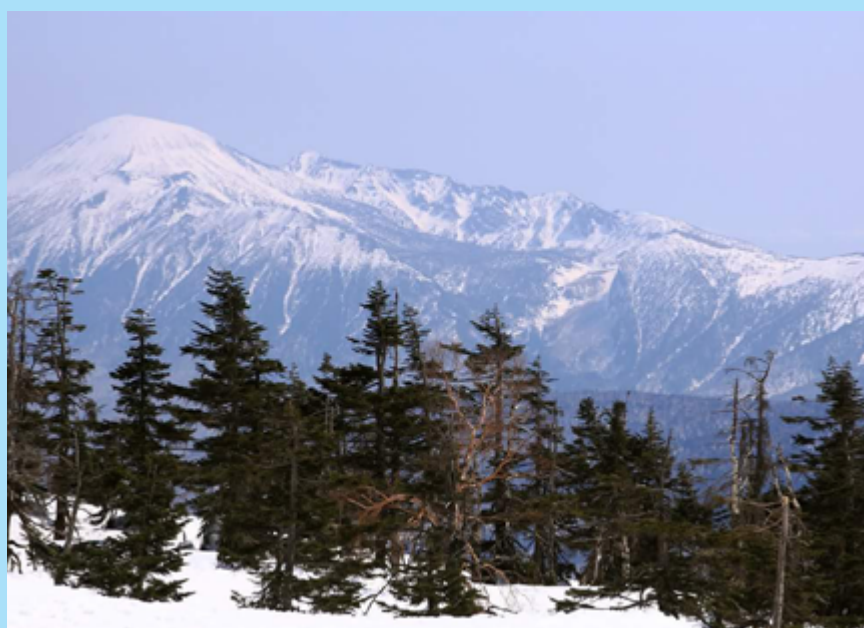
【銀鮭切り身】

### 一簡単レシピ

【材料】 鮭2切れ 塩、コショウ 少々、酒 大1、小麦粉大2、バター 10g

### 【作り方】

- \* 鮭の骨、皮を取り塩・コショウ、小麦粉をまぶして冷蔵庫にしばらく入れます。
- \* フライパンにバターと油を敷き、鮭を入れて中火でこんがり両面を焼きます。



写真でお伝えする

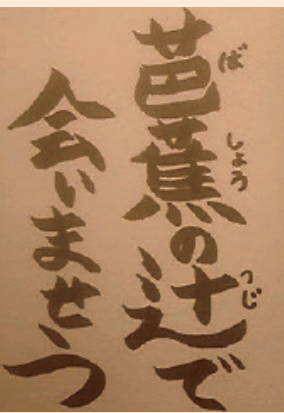
写真撮影：尾崎匠

## 東北の風景（登ってみたい山）





連載  
むかしばなし



第四十九話

(最終回)

「あなたの、あの辻で」

泰衡は、突如自分と少女が巨大な洞窟の入口に出た事に気づいた。そこは縦横に巡らされた堅固な柱と天井で塞がれている。

「何と・・・ここは、達谷窟ではないか！」  
平泉の西南に遠からず位置する、古代蝦夷の砦跡。

「まあ、そんな遠くまで」  
若は、正気に戻っていた。どうやら、あの猛々しき野心の女・阿古耶姫はその身から離れたようだ。



奥羽越現像氏紹介

一九七〇年山形県鶴岡市生。札幌、東京を経て、仙台に移住。市内のケルト音楽サークルに所属し、あちこち出沒し演奏する。フィドル(ヴァイオリン)担当。

「三郎君は・・・忠衡公ほどうされたらうか。」  
「北へ向かったわ。義兄上様をお救いする為にね。トヨも早くここを出なさい。貴女の新しい時代は、やはり北にしかないのよ。」

「いえ、泰衡さま。ご自身の事を優先させて下さい」「いや、しかし。」

「私も、実のところ平泉の都を見ておきたいのです」  
泰衡は少女の大胆さに驚いたが、その横顔に、迷いは微塵も見られなかった。

「イアンパヌ、この様は」  
トヨは爆音と煙の中、客車の屋根に立つ女に訊く。  
「結果は宮城野の柿の精力に変化を与えた。その実を口にした者の記憶と心象を投影して、境界内に強い現実感をもたらす幻術だ。」

「長里国八郎が眼鏡を灰で真っ白にしながら叫ぶ。」「しかし・・・この光景は。仙臺が、かような破壊に臥した事など、嘗てないぞ」

「私の三十人の姉妹らが覚醒して、五人ずつが組になつて境界六地点にいる。西で東の暁を鏡に受け、他の五地点の鏡に送った最後の東からの反射が、この光景・・・都、第一の死の姿よ」  
善助が問うた。

もを集めよ。合議を開く」  
居合わせた武官らが大通の向こうへ駆けていく。

都市平泉の景観は、壮麗を極めていた。おそらく昭和の時代の誰一人、ここまでの古都の繁栄を想像し得ていないであろう。少女の目にも、後世に名高い無量光院の姿だけは判った。馬上にてその幻の如き美観に圧倒されるうち、すぐ向かいの藤原の居館に入った。

泰衡の正室にもてなされ、荘厳な屋敷にてしばしくつろいでいると、早くも合議の知らせが届いた。若が同席できるはずもなかったが、泰衡に政庁へ案内され、大広間の襖の陰から議会の様子を垣間見る事が許された。

奥羽各地の首領らが居並ぶ中、河田次郎が進言する。「この河田守継、泉様が命により、御館を出羽比内へお連れ申し上げ奉る。」

「なに・・・三郎の命とな」  
若は知っている。藤原氏累代の家臣・比内の河田次郎が泰衡を裏切り、その首を頼朝に届ける、という史書の記述を・・・泰衡を制止すべきか？同行し真実を見届けるべきか？否、自分如きに歴史を変える資格があるか。

「伊達様、参りましょう。私もお供させて頂きたい」  
その夜、泰衡の家族との夕餉の席で、若は言った。「何を云われる、若どの」「私は、語り部の娘です。伊達様の真実は私の時代に伝えられています。身に

余る機に浴しましたが、天命と心得、貫徹致します」  
頼朝は草原に突つ伏した格好で、目覚めた。辺りは全くの原野で、一面に倒れた己が夥しい兵たちも、同じように皆果然としている。先程までの地獄絵図は一体、何だったのか？単なる幻影とは到底思えない・・・

「宮城野に敷かれた新たな強い結界だ・・・この円形と、大湯の円形群との組み合わせを計算する事で、彼の地へ降りる時間の調整が可能なる事がわかった」  
「では・・・若どのを七百年後の、元の世界へお返しする事ができるのだな。」

若は言った。  
「泰衡さま・・・貴方は、私に平泉を見せて下さった。私は貴方に、仙臺をお見せしたいと思うのです。」

「兄者、後の奥州は任せて、駆け巡ってくるがよい。」  
膨大なる時間の海を越えていく汽車の乗客らの耳に、あの柿の精・丹十郎の事が響く。ほんの、東の間の事。俺の実はお前様方に選択肢を与える。ここでの事を一切忘れれば、元の時代で天寿を全うできよう。忘れなくてはならぬ、遠からずまた大天狗の領界へ招く事になる。それは一見、死にも似ていようが。」

「はは・・・選択の余地など、ないではないか」  
機関士が笑った。多くの乗客達も・・・そして次の瞬間、列車は遂に、あの時代の鉄路上に戻ったのである。

遙か昔、津軽の蝦夷が朝廷の侵攻を受けた遠く南、白河の同胞へ救援に駆けつけた・・・その時にも使われた、瞬時に遠距離を移動できる森の洞道なのだ。そしてあの男、芭蕉もここから跳んだ・・・忠衡は説明する。

「宮城野に敷かれた新たな強い結界だ・・・この円形と、大湯の円形群との組み合わせを計算する事で、彼の地へ降りる時間の調整が可能なる事がわかった」  
「では・・・若どのを七百年後の、元の世界へお返しする事ができるのだな。」

「兄者、後の奥州は任せて、駆け巡ってくるがよい。」  
膨大なる時間の海を越えていく汽車の乗客らの耳に、あの柿の精・丹十郎の事が響く。ほんの、東の間の事。俺の実はお前様方に選択肢を与える。ここでの事を一切忘れれば、元の時代で天寿を全うできよう。忘れなくてはならぬ、遠からずまた大天狗の領界へ招く事になる。それは一見、死にも似ていようが。」

「はは・・・選択の余地など、ないではないか」  
機関士が笑った。多くの乗客達も・・・そして次の瞬間、列車は遂に、あの時代の鉄路上に戻ったのである。

遙か昔、津軽の蝦夷が朝廷の侵攻を受けた遠く南、白河の同胞へ救援に駆けつけた・・・その時にも使われた、瞬時に遠距離を移動できる森の洞道なのだ。そしてあの男、芭蕉もここから跳んだ・・・忠衡は説明する。

「宮城野に敷かれた新たな強い結界だ・・・この円形と、大湯の円形群との組み合わせを計算する事で、彼の地へ降りる時間の調整が可能なる事がわかった」  
「では・・・若どのを七百年後の、元の世界へお返しする事ができるのだな。」

「兄者、後の奥州は任せて、駆け巡ってくるがよい。」  
膨大なる時間の海を越えていく汽車の乗客らの耳に、あの柿の精・丹十郎の事が響く。ほんの、東の間の事。俺の実はお前様方に選択肢を与える。ここでの事を一切忘れれば、元の時代で天寿を全うできよう。忘れなくてはならぬ、遠からずまた大天狗の領界へ招く事になる。それは一見、死にも似ていようが。」

「はは・・・選択の余地など、ないではないか」  
機関士が笑った。多くの乗客達も・・・そして次の瞬間、列車は遂に、あの時代の鉄路上に戻ったのである。

「兄者、後の奥州は任せて、駆け巡ってくるがよい。」  
膨大なる時間の海を越えていく汽車の乗客らの耳に、あの柿の精・丹十郎の事が響く。ほんの、東の間の事。俺の実はお前様方に選択肢を与える。ここでの事を一切忘れれば、元の時代で天寿を全うできよう。忘れなくてはならぬ、遠からずまた大天狗の領界へ招く事になる。それは一見、死にも似ていようが。」

「はは・・・選択の余地など、ないではないか」  
機関士が笑った。多くの乗客達も・・・そして次の瞬間、列車は遂に、あの時代の鉄路上に戻ったのである。

遙か昔、津軽の蝦夷が朝廷の侵攻を受けた遠く南、白河の同胞へ救援に駆けつけた・・・その時にも使われた、瞬時に遠距離を移動できる森の洞道なのだ。そしてあの男、芭蕉もここから跳んだ・・・忠衡は説明する。

「宮城野に敷かれた新たな強い結界だ・・・この円形と、大湯の円形群との組み合わせを計算する事で、彼の地へ降りる時間の調整が可能なる事がわかった」  
「では・・・若どのを七百年後の、元の世界へお返しする事ができるのだな。」

「兄者、後の奥州は任せて、駆け巡ってくるがよい。」  
膨大なる時間の海を越えていく汽車の乗客らの耳に、あの柿の精・丹十郎の事が響く。ほんの、東の間の事。俺の実はお前様方に選択肢を与える。ここでの事を一切忘れれば、元の時代で天寿を全うできよう。忘れなくてはならぬ、遠からずまた大天狗の領界へ招く事になる。それは一見、死にも似ていようが。」

「はは・・・選択の余地など、ないではないか」  
機関士が笑った。多くの乗客達も・・・そして次の瞬間、列車は遂に、あの時代の鉄路上に戻ったのである。

「兄者、後の奥州は任せて、駆け巡ってくるがよい。」  
膨大なる時間の海を越えていく汽車の乗客らの耳に、あの柿の精・丹十郎の事が響く。ほんの、東の間の事。俺の実はお前様方に選択肢を与える。ここでの事を一切忘れれば、元の時代で天寿を全うできよう。忘れなくてはならぬ、遠からずまた大天狗の領界へ招く事になる。それは一見、死にも似ていようが。」

「はは・・・選択の余地など、ないではないか」  
機関士が笑った。多くの乗客達も・・・そして次の瞬間、列車は遂に、あの時代の鉄路上に戻ったのである。

遙か昔、津軽の蝦夷が朝廷の侵攻を受けた遠く南、白河の同胞へ救援に駆けつけた・・・その時にも使われた、瞬時に遠距離を移動できる森の洞道なのだ。そしてあの男、芭蕉もここから跳んだ・・・忠衡は説明する。

「宮城野に敷かれた新たな強い結界だ・・・この円形と、大湯の円形群との組み合わせを計算する事で、彼の地へ降りる時間の調整が可能なる事がわかった」  
「では・・・若どのを七百年後の、元の世界へお返しする事ができるのだな。」

「兄者、後の奥州は任せて、駆け巡ってくるがよい。」  
膨大なる時間の海を越えていく汽車の乗客らの耳に、あの柿の精・丹十郎の事が響く。ほんの、東の間の事。俺の実はお前様方に選択肢を与える。ここでの事を一切忘れれば、元の時代で天寿を全うできよう。忘れなくてはならぬ、遠からずまた大天狗の領界へ招く事になる。それは一見、死にも似ていようが。」

「はは・・・選択の余地など、ないではないか」  
機関士が笑った。多くの乗客達も・・・そして次の瞬間、列車は遂に、あの時代の鉄路上に戻ったのである。

「兄者、後の奥州は任せて、駆け巡ってくるがよい。」  
膨大なる時間の海を越えていく汽車の乗客らの耳に、あの柿の精・丹十郎の事が響く。ほんの、東の間の事。俺の実はお前様方に選択肢を与える。ここでの事を一切忘れれば、元の時代で天寿を全うできよう。忘れなくてはならぬ、遠からずまた大天狗の領界へ招く事になる。それは一見、死にも似ていようが。」

「はは・・・選択の余地など、ないではないか」  
機関士が笑った。多くの乗客達も・・・そして次の瞬間、列車は遂に、あの時代の鉄路上に戻ったのである。

遙か昔、津軽の蝦夷が朝廷の侵攻を受けた遠く南、白河の同胞へ救援に駆けつけた・・・その時にも使われた、瞬時に遠距離を移動できる森の洞道なのだ。そしてあの男、芭蕉もここから跳んだ・・・忠衡は説明する。

「宮城野に敷かれた新たな強い結界だ・・・この円形と、大湯の円形群との組み合わせを計算する事で、彼の地へ降りる時間の調整が可能なる事がわかった」  
「では・・・若どのを七百年後の、元の世界へお返しする事ができるのだな。」

「兄者、後の奥州は任せて、駆け巡ってくるがよい。」  
膨大なる時間の海を越えていく汽車の乗客らの耳に、あの柿の精・丹十郎の事が響く。ほんの、東の間の事。俺の実はお前様方に選択肢を与える。ここでの事を一切忘れれば、元の時代で天寿を全うできよう。忘れなくてはならぬ、遠からずまた大天狗の領界へ招く事になる。それは一見、死にも似ていようが。」

「はは・・・選択の余地など、ないではないか」  
機関士が笑った。多くの乗客達も・・・そして次の瞬間、列車は遂に、あの時代の鉄路上に戻ったのである。

# シリーズ 遠野の自然 「遠野の芒種」 遠野 1000 景より



早朝散歩

今年の天候は、予想を飛び越した変化が激しすぎて、とても落ち着かない。少し前には、春になったばかりだというのに、真夏のよような暑さが訪れたかと思

えば、一転して平年並み以下の気温に下がったりした。先日も、すでに六月になったというのに、北海道では氷点下まで下がったということだ。これでは、徐々に春から初夏を向かえるという緩やかなプロセスのなかで、ゆっくりと体調を整えていく暇もない。天候だけではなく、国内外のニュースも落ち着かないものばかりである。何か良からぬことが起きる予兆ではないかと不安にもなる。これらの落ち着かなさが短期間で収束せずに長引くと、憂うつを通り越し、病気にでもなってしまうような気がする。ほんとにどこかで



菜の花と kenji 号

収束して欲しいものだ。\* そうした心境のときに、遠野のこれらの写真をみると、人間の無軌道な動向から一時解放されて、安定した自然の営みを感じ取れてほっとするとともに、落ち着かなかった気分が大分和らいでくる。\* ムラサキヤシオの鮮やかなピンク、ヤエザキヤマブキの目の覚めるようなオレンジ色に吸い込まれる。アケビの花は初めて見るが、とても興味深い形と色あいである。「萌える」という写真に写った山のさまさまないろどりは、一反の着物のようにも見える。

菜の花と kenji 号のコントラストもまぶしい。もう少しで夏至という季節の花々は生命観にあふれている。\* 一方、早朝の薄暗いなかを散歩する老婆と周囲の景



萌える

色がゆったりした空間を形成し、何かおとぎ話めいた感じがして、まるで異空間に迷い込んだような錯覚に襲われる。「水鏡」でも、早朝の時間の景色が水面に二重写しになり、日常世界とは別の

世界の入り口が見えてくるようだ。せせこましく、息苦しい日常から解き放ってくれるさまざまな遠野の景色である。



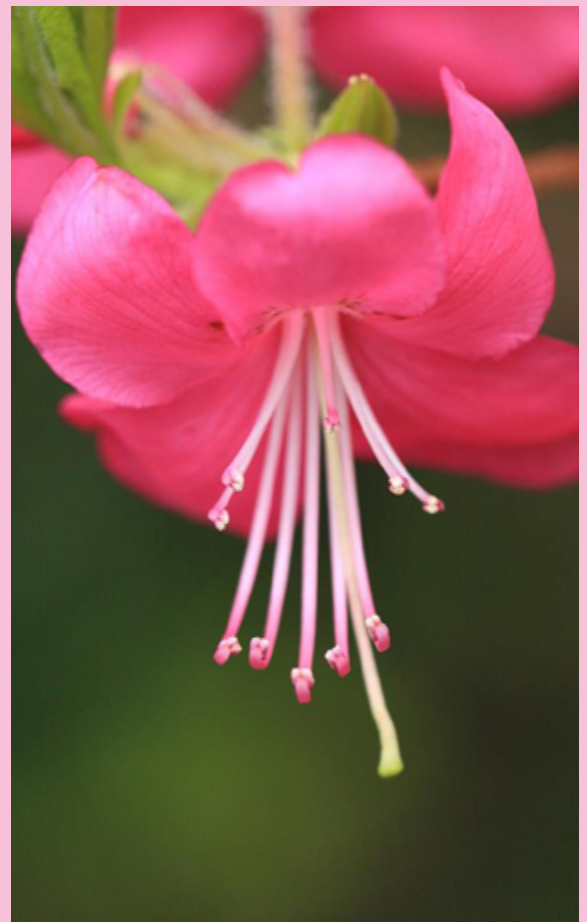
水鏡



ヤエザキヤマブキ



アケビの花



ムラサキヤシオ

# 東北大震災発生から6年後以降の被災地自らの復興活動と復興支援活動のあり方についてより根本から大胆に考えてみる

\*(注)

筆者はあえて「東北大震災」と呼んでいるので、けつして間違いいではないことをまずお断りしておく。さまざまな観点から、いまあらためて考えてみても、その命名が正しかったと思える。

## ①六年三カ月後の今考えること

東北大震災から六年三カ月経過した今だから考えることができることがあるはずである。

当然ながら、震災直後に考えて実行することもあり、それが落ち着いてしばらく

してから考えて実行すべきこともある。明確に分けて検討すべきと考える。

いま概観すると、応急措置は一段落したと判断できるので、なおさら区分して考えるべきである。

振り返ると、震災直後にまずなすべきことは、ライフライン確保であり、ここは何とか乗り切ったと評価できる。

その次は、目先のインフラ復旧であったが、ここはまだ大分遅れている被災地もある。すでに復旧したといえるところもある。被災の度合いによるし、また福島第一原発に関連する地域特有の問題もある。

では、いま考えて実行することとはなんだろうか。

一方、被災者の心の問題はまさにこれからであり、その考察は前号、今回号で一部触れたので、そちらを参照していただきたい。

## ②復旧から復興フェーズへの大転換

ひとことで表現すれば、復旧フェーズから復興フェーズへの転換である。

筆者が考える復興とは、震災前に比べると大きく崩れてしまった被災地域の暮らしの根本的回復であり、震災発生前から大きく落ち込んだ地域経済の復興もあるし、産業の再構築もあり、震災前の姿を復旧するのでないさまざまな挑戦的な試みの具体的な実現もある。

当新聞の復興期間に関する基本スタンスは、どんなに短く見積もっても、十数年以上であり、普通のペースで行けば、三十年程度を考えた方がよいだろう。このスタンスからすれば、六年三カ月という期間は約五分の一に相当し、残りは五分の四、八割である。まだ先が長い。

下がったからといって嘆いている場合ではない。そんなことでは、あと十年もしたら大いに後悔することは間違いない。大局から現在を捉える発想が不可欠である。

さておき、まず、被災地から避難している人々がまだたくさんいることがある。そして、避難生活が長くなり、避難地が本拠となり、元の場所には戻らない被災者が多くなっていることもある。当然のことである。

## ③復興支援人材

本格的な復興には資金も必要だが、それ以上に必要なのは人材である。この点で現在、複数の問題があることも確かである。一昨年の日本創生会議による地方の人口減少予測は

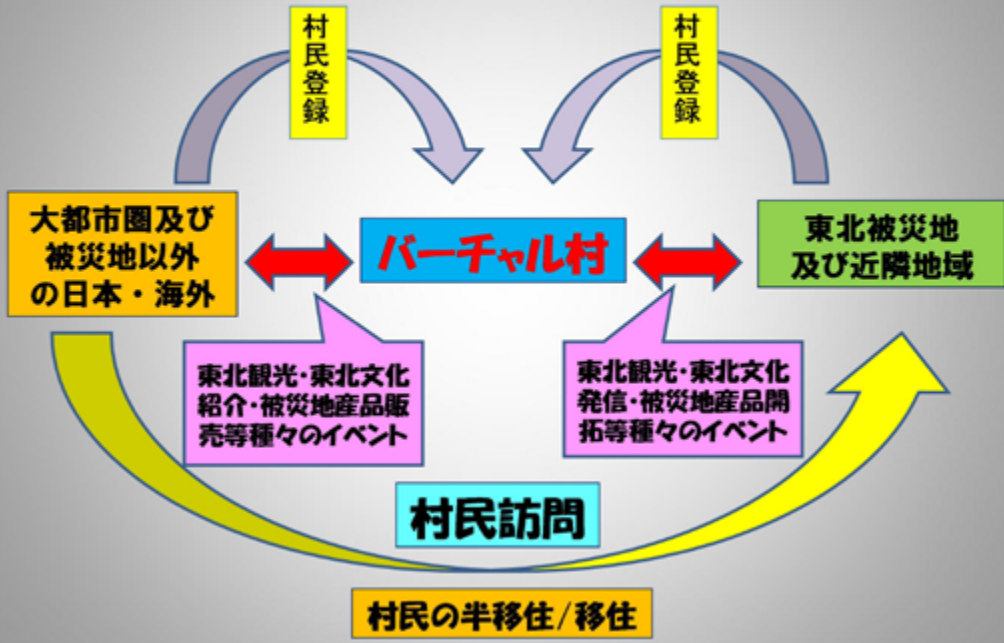
しかし、本格的な復興に多くの人材が必要ないというまでもない。

## ④移住政策オンリー

今年(平成29年)の二月二十五日(土)に、日本政策金融公庫が、東北6県との共催により、東京都千代田区において、「東北で創業・事業承継・就農+移住・定住」東北6県移住応援イベント「in 東京」を初開催した。

地方創生運動の一環である。地方創生運動の一環である。地方創生運動の一環である。

## 東北被災地に設立可能なバーチャル村の構造



「被災地に作る『バーチャル村』イメージ



みやぎ移住フェア—石巻アフター交流会の様



みやぎ移住フェア—石巻アフター交流会の様

各担当者は、大きな声ではないえんが、本音を言えどそう思うと答えたのにはこちらが驚いた。

大都市圏に居住して復興支援に興味ある人々は、復興支援はハードルが高すぎると思っっているであろう。そうした支援希望者はたくさんいるはずで、中核都市の移住促進担当もその

しかし、復興支援が目的でなくとも、移住が簡単に決断できる人は限られているであろう。

したが、国の政策の後押しがあるため、正面からは批判がむずかしいのだろう。

## ⑤みやぎ移住フェア—石巻アフター交流会

そんな折、FACEBOOK



日本政策金融公庫の東北移住促進パンフレット



復興支援の拠点としての三陸酒海鮮会

で知り合った、一般社団法人「SHINOMAKI2.0」に所属し、最近東京から宮城県石巻市に移住したという矢口龍太君という若者に、先月十四日に「みやぎ移住フェア」石巻アフター交流会」に誘われた。

さまざまな話をして、時の経つのも忘れるほど楽しかった。そこでも移住と半移住の投げかけを試みた。突然の提案だったためか、明確な返答はなかった。

### ⑥半移住から「バーチャル住民」へ拡大

復興関係者には、前述のような半移住という考え方ももつと真剣に考えてもらいたいものだ。これならば、今の生活の何もかも捨てて移住しなくても済む。どちらでも多く暮らすかの比重も人それぞれに任せれば良い。助成金からむと、前述の安易で強引な発想に引きずられるが、それを断ち切るべきである。目的は人材を集めること

であり、被災地の人口を増やすことではないことを肝に銘じる必要がある。ならば、もつと発想を進めて、被災地に移住どころか、半移住もしくても良いではないか。それは、現在の居住地に居ながら、バーチャルな被災地住民となつて、バーチャル空間で交流し、たまにはオフ会と称して、リアル空間でも交流するのである。この考え方は、当新聞四十五号一面でも記事にした。

**事業企画提案!**  
**「東北んめえもん開発」**  
「んめえもん」を東北内で独占せず高付加価値化で販売



普通より小型の毛ツブ

きると考えるので、ぜひ何らかの形で実現してもらいたいものである。必要ならば、多方面からの協力もしたいと思う。

### ⑦新たな食品市場開発としての「東北んめえもん開発」

話題を転じて、大きく落ち込んだ地域経済の復興、産業の再構築という観点からは、前回号で提言した「東北んめえもん開発」という事業提案がある。被災地は震災前、水産業を主な生業としていたところが多い。慣れ親しんだ水産業を活かして、地域経済を復興する方法はないか、新産業を企画できないかとずつと考えてきた。

### ⑧交流の場参加継続

とにかく、時間の許す限り、さまざまな復興支援の場に積極的に参加することを心がけていこうと思う。特に、若手との交流は楽しいし、何かを創出するエネルギーに触れるだけで、こちらが元気になる。「若者、ばか者、よそ者」ということが復興支援でよく言われてきたが、筆者はこれこそ復興支援のキーポイントだと考えている。こうした人材を集め、被災地で何かを産み出せたら、



復興バー銀座・石巻ナイト



復興バー銀座・石巻ナイト

これ以上幸福なことはないし、目に見える被災地貢献が可能となる。そんなことで、これまで何度か参加した「復興バー銀座・石巻ナイト」に今月十日に参加した。旧知の支援者や初めてお会いする関係者と挨拶しつつ、宮城の地酒を堪能しつ

### ⑨復興支援の拠点としての三陸酒海鮮会

つ、意見交換をした。交流の場といえば、筆者の最初で最大の拠点は、「三陸酒海鮮会」である。さまざまな人々がこの会に参加するが、もう五年目に突入した。一月半に一回



復興バー銀座・石巻ナイト



復興バー銀座・石巻ナイト

の割合で継続開催してきて、今月十七日で二十八回目となる。これまで何人の人たちが参加したのか勘定もしていないので不明だが、これからもここを一大拠点としつつ、派生的に、さまざまな交流の場に参加していこうと思う。

会の趣旨は、当初、あまりハードルを高くしても長く続かないだろうということで、気軽に参加できるように、東京に居ながらにして、三陸海鮮を食べ、東北地酒を飲んで間接的な復興支援をしようという敷居の低い会であるが、いつも話の内容のレベルと志は高い。